



昭和48年(1973年)  
4月号(No. 334)  
社団法人 日本山岳会  
(J. A. C.)

## 目次

|      |                      |
|------|----------------------|
| 本文   | 日本アルプス探検時代…三枝守博…1    |
|      | 慰めの詩……………田辺主計…2      |
|      | 南アルプス地名雑考…山本朋三郎…2    |
|      | 山と蝶のものがたり11…春田俊郎…3   |
|      | 本元飯豊山……………藤島 玄…4     |
| 会員通信 | 辻村太郎氏秩父宮記念学術賞受賞…1    |
|      | パキスタンの登山事情…芳野勉夫…3    |
|      | 平ヶ岳の思い出……………土橋進一…5   |
|      | 九山山房談の会……………田中栄蔵…5   |
|      | 漢峯山をめぐる話…佐々木四十臣…5    |
|      | 大槌の旅、その後……………植村直己…6  |
|      | 幻の花のふるさと……………坂倉登喜子…6 |
|      | 北穂集中登山……………沼倉寛二郎…7   |
|      | 著者の立場再び……………白川義員…9   |
| 図書紹介 | 自然と旅の原点……………春田俊郎…8   |
|      | 満蒙紀行……………島田 巽…8      |
|      | ネパールの伊藤博文…島田 巽…8     |
|      | カナディアンロッキース          |
|      | 登山報告書……………織内信彦…8     |
| 会務報告 | 武田久吉著作展目録③…春田俊郎…4    |
|      | 吉沢一郎氏寄贈図書……………山本良三…7 |
|      | 集会・年間計画……………神崎忠男…7   |
|      | 集会委員会より……………7        |
|      | 図書室便り……………7          |
|      | 三月理事評議員会……………9       |
|      | 会員異動……………9           |
|      | 住所変更……………10          |
|      | ルーム日誌……………10         |
|      | 復活・新入会員……………11       |
| お知らせ | 登山技術講習会……………10       |
|      | 金山平木暮翁碑前懇親会……………10   |

## 日本アルプス探検時代

### 第一回山岳史懇談会から

### 三枝守博

私の山登りは明治三十六年の木曾御岳からはじまるんですが『太陽』に出された小島鳥水さんの「甲斐の白峰」を読んで、とても行きたくなりまして、鳳凰と白峰北岳にのぼったのが大きな山にのぼった最初でした。明治三十七年のことです。このとき、足ならしに御殿場口から富士山にのぼりました。が、幸いに甲府に知人がいて芦安の村長さんに紹介され、案内人夫を二人やとしました。米をどのくらい持つていたらいいかとききましたら一升ぐらいでいいだろうということでしたが、甲州側の一升は三升にあたるということを知りなかつたのですから、たいへんおどろきました。野呂川をさかのぼっているとき、うしろからきた外国人の宣教師と一緒に。ウェストンさんの友人でA・E・ウェップという方でした。あとで山岳会に入会した人ですが、この方と一緒に白峰にのぼったわけですが、峠差の小屋をへてあの粗末な御池小屋に寄りましたとき、その

入口の板にウェストンさんが鉛筆で一週間まえに白峰にのぼった旨を書きつけておられました。北岳の頂上ではあいにく天候がわるく眺望にめぐまれず残念でした。そのときは飯沢に下って帰りました。

こんなことから山登りに憑かれはじめ、小島鳥水とはいいたいどんな方だろうと想像したりしていました。そのうち「文庫」という雑誌に小島さんがいろいろとお書きになられていることを知りまして、神保町の古本屋で「文庫」を探しあつて、鳥水さんの登山記を読むようになりまして、しばらくして私は休むことになり、麹町の病院に入院したことがありましたが、そこで戸塚英之介という高野鷹蔵さんの学友と知りあいて、山岳会が創立されることを聞きまして、入会した次第です。三十九年の春のことでした。そんなわけで小島さんや高野さんとずっとご懇意にさせていただき、私の生活のなかで山の比重はますます大きくなりまし

て、すべてが山」という調子になってしまいました。

『山岳』にはじめて発表いたしました文章は「日本北アルプス縦走の記」(第四年七月)というもので、これは四十一年一月に白馬岳から五竜岳まで歩き、鹿島槍の北面を下ったときのことです。白馬の頂上の小舎に泊ったとき、大黒鉱山に行くという人と会いまして、それでは一緒に行くということになり、縦走をしたわけですが、途中で、雷雨にあつたとして時間がかかりまして、大黒鉱山についてのは明け方の一時でした。鉱山といっても銅を掘っているのかいのかわかりませんが、でしたが、ともかく当時としては留守番夫婦がいるだけでした。白馬から尾根づたいに歩けるということがこれで実証できたわけです。

ぜひ申しあげておきたいことは、ゴリウザンという名前です。同行した案内人の松沢菊一郎(細野の猟師)に山の名前をききましたら、ただゴリウザンというだけでどんな字を書くかわからないというのでした。後立山もゴリウザンと読むことができたわけですが、私は記事の中で「五竜」という字をあてて書いておきまし

た。宛字のつもりで書いたものが、その後の地図に「五竜岳」と記載されることになりました。へん縮しています。こんなことから当時でもいろいろと文句が出てしまいました。小島さんからは、だいたい五竜なんて伝典にもないなんてお叱りをつけましたけれど、そのうち小島さんか手紙をいただいたので伝典に五竜という字があつたとお知らせいただいたこともありました。私は申し訳ないとおもっておりますが、正しい名前がありまして直していただきたいと考えております。

それから、これ御存じですか。(ネタイビンの白い石をしめして)これは高瀬川の湯俣でとれるあられ石なんです。あの噴湯丘からとれるものですが、後立山縦走の前年に、横沢類蔵と燕岳に登り、この石の話をききましてわざわざ出かけたほどでした。しかしその当時とてもほとんど探集されてしまっていて、かんたんに得られたというわけでもないんです。葛の湯に泊ったとき、だれかの紹介で大町の数学の先生に会いまして、三つ四ついただいで、こんな風に細工して永く愛蔵しています。(記録・近藤信行)

(付記) 右の記事は三月二十九日にひ

## 辻村先生授賞式と

### 祝賀パーティ

らかれた「山岳史懇談会」における三枝名譽会員のお話を一部抄録したものです。詳細は次号に掲載いたします。

本会名誉会員、辻村太郎先生の秩父宮記念学術賞(第九回)授賞式が、三月二日午後三時から銀行クラブで行われた。多年にわたる日本の山地地形に関する研究」に対して与えられたもので、和達選考委員長の報告があり、秩父宮妃殿下のおことば、文部大臣祝辞があり、つづいて先生が約二十分間にわたり、少壮時代からの研究史を回顧された。先生の答辞はほとんども聞き取れなかったが、その後バティにうつり、水割りを傾けながら水河の堆石の説明をはじめられる頃には次第に言葉明瞭となり、妃殿下もこやかに耳を傾けておられた。

散会后、有志が集まって先生をルームにお招きして些かな小宴を張ったが老先生はますますお元気で、三枝、横、藤島、日高などの長老方、愛弟子の田中薫博士などと快談劇刻、ご持参の地図、新聞の切抜きなどを披露され、アルプスの断層地形についての新見解を論ぜられるなど意気軒昂、とうてい八十五歳の高齢とお見受けされなかつた。それでもご健康を考えて七時頃、会員の車でお送り申し上げたが、途中湯島の梅を賞せられたり、湯島マニションを見て「厭なものが建ちましたね」と嘆ぜられたり、ご帰宅の後も庭前のライラックの由来を説明されたり、すこぶるお元気であった。

(祝賀会出席者氏名、次号掲載予定)  
(板倉勝正)

## 慰めの詩

田辺主計

戦前のことですから、もう三十年も前、たびたび山歩きに出かけた時に、

A・E・ハウスマンの『シエロプシアの若人』を持って行き、そばに人いない時には声をあげて読んだりしたが、今でも町へコフィを飲みに行く時などにもこの詩集をポケットに入れて行くことがあります。これは若人の死を嘆き、人生のはかなさと、諸親の念が、シエロプシアの静かで美しい田園風物を背景に、見事な簡素な言葉で唱われているのです。人は旅に出る時にはいろいろの本を伴侶として持って行きます。エヴェレスト登山の本の中にも、その人たちが山で読んだ本のことと記されています。また、S・チャプマンの著書『Living Dangerously (一九五三年)』の中の『Living and Reading』の章に、この人詩の音読を好んだことやハウスマンのこの詩集の名も出ているのを見てうれしく思いました。私は詩の中でも叙事詩などよりも牧歌調哀歌バスター・エレジが特に好きです。人はいろいろの悩みのある時、楽しい詩よりも哀歌によって慰められる方が多いのではないのでしょうか。詩は音楽をきくと同様に同じ詩を何時も読み返したくなります。

私は、前にフランス語の発音を習ったことがありましたが、これも詩を黙読するだけでなく音読したかったからでした。詩でも作曲されているのは暗誦し易いです。さきに述べた『シエロプシアの若人』もヴォン・ウィリアムズが作曲しています。ヴェルネスの『詩法』の始めにある「何よりもまず音楽

を」(De la musique avant toute chose) という言葉はよく知られていますが、ヴェルネスの詩はドゥビュシイやフォーレなどにより美しく作曲されていますし、ショソンやデュバルクなどによるいろいろの美しい歌曲が私には忘れられません。そして、これらの作曲家が如何に自国の詩を愛したことが、と感ずるのです。

音楽と人の交わりも不思議なものです。人類は原始の頃から音調メロディを心に浮かべて、何千年も前にも笛や琴や太鼓を作っていました。そして喜びの時にも、悲しみの時にも唱ったのでありませんか。私は音楽の中でも民謡を好み、いろいろの国の民謡集を手許においておきます。民謡も他の民芸品と同じく、その美しい歌曲の作家も誰か判らないのが多いのです。あの黒人霊歌ニグロ・スピリチュアルもアメリカ大陸へつれて行かれ苦しい奴隷生活を送った黒人たちが、歌によってお互いに慰め合い、また深い悩みを伸の救いを求める歌は、聞く人の心を打ちますが、それらも多くは、この人たちの間に自然に生れた音楽なのです。あの著名な黒人歌手のマリアン・アンダスンがあるニグロ・スピリチュアル歌集のために書いた前書きの中に「音楽は人種、国別などを越えて人の心から心へと話しかける」という言葉がありますが、私もこれらの歌をきく時に、自分も黒人の中の一人のような心地になるのです。

一九七〇年十一月末に失った私の弟の追悼文が『山岳』六十六年号に掲載されましたが、執筆をすめられた時いろいろの思い出が心の中は淋しく浮かんではいたけれども、なかなか筆が進まず一日一日と日が経って行きました。けれども、それも愛誦のルコント・ドゥ・リールの詩やアイアランド民謡中の歌詞が何となく聞えて

来るようで、その言葉を借りて、やっ

と書き上げたのでした。

ルコント・ドゥ・リール (1828-97) のナニは『古代詩集』の中にあり、ショソンはこの詩は「野鳩親しむ森、やわらかな草の群、この流れ早き泉の水、あそここの冷え冷えとした野路、花咲き誇る春、木々のうっそうと茂る夏、木の葉も赤らむ秋、天よ地よ」と美しい自然に呼びかけ、また「若き神よ」と共に「涙を流して下さい」と歌います。が、終わりに「なつかしき四方の風物よ、ナニのことを語る勿れ、ナニはもう戻っては来ない」と嘆くのです。

また、『岡また岡を越えて遙か遠くへ』はアイアランド民謡中の一つで、ノラ・チエンスンの歌詞です。——これは「月影の暗い夜に聞えて来たフェアリーの静かにかすかな歌声で想う人を夢見ていたその夢も、ふと、とぎれてしまった。フェアリーの吹く笛の音に誘われて淋しい臥戸を去り想う人の後を追って遙か遠くへと、岡また岡を越えて、さきよって行くのだが、フェアリーの歌は、ただ「岡また岡を越えて遙か遠くへ」と繰り返して聞いただけなので、と歌い、そして終わりに「やがて朝が来て日が立ち昇って、遠くへ去った人の悲しみに、私には夜も明けず、ただ、一日中フェアリーの唄う「岡また岡を越えて」が繰り返して聞えて来るのでした」という静かなメロディを伴う歌なのです。また「すべて生あるもの、やがては滅する」と書き生きたのは、フーゴ・ヴォルフ (1861-1903) 作曲の『メケランジェロ』(1903) の三つのソネット中にあるドイツ語訳詞 Alles Endet, was Ensteht, und 消滅する、と書かれています。

弟の追悼文を書くに当たっていろいろ先人から借用した言葉にお礼を述べた

い心と共に、このようなことを書きました。「慰めの詩」と書きましたのも愛読したジュールジュ・デュアメル（「慰めの音楽」という書名が思い出されてです。この本は一九五二年に戸田邦雄氏の訳書が出ていますが、その絶版になっっていることを惜しみ、尾崎喜八氏が新しく訳されたのがその後白水社から刊行されました。

## 南アルプス地名雑考

山本朋三郎

会員牧野衛氏より贈られた『日本南アルプスと大井川』（昭和三年島田保勝会発行）の文中には、現在一般的に言われている地名が大分異なっている。元来、地名は本来的な発音が人と時間がたつにつれて異なってくる場合が多い。普通、あまりその地域住人の直接の治世者、またはその代弁者の変らぬ限り、その地名はかなり長期間、正確に伝世してゆくのが法則である。たとえば、徳川幕府時代の江戸が薩長政権の世になると東京と変ったり、樺太がサハリンに変名したりする。

南アルプスの山名や地名にはこれほどの極度の地名変更の力は働かないが、一般的な地名の変遷を考える時よりかなり能力が南アルプス南部では働いていることが考えられる。大井川を挟んで兩岸の山々はほとんど五指に数えるほどの人または会社の所有に属している。代々居住している住民が伝世的に呼んでいる地名も、その地域に強大な影響力のある人または会社に属する人達が、その地名を聞いた状況で多少の間違ったおぼえ方をしたり、これを報告書等に善意の誤りで誤記または当て字を用い、これがいつの間にか代々

居住する住民へ逆作用して一般化してしまう、というものである。住民も少ない地域ではこの代々居住者以外の者でその地域にかなりの影響力のある人または、その代弁者の誤記、当て字は強烈に地名の変更にも力が働くものである。

今、上述した小冊子の中から発音の変わったもの、字の変わったものをいろいろ出してみる。カッコ内は現在一般的に用いられている呼び方である。本来的な言い方は「資料は各町村役場及千頭帝室林野局出張所の親しく調査寄与されたもので、その根拠の確実を喜ぶ……」と同書に記されている。

転着（転付）、燕頭（ツバクロアタマ）、大崖頭（オオガシノアタマ）、小河内（コガウチ）、蛇骨（ジャコ）、高瀬島（コウセジマ）、光岳（テカリダケ）、唐木戸滝枯木戸滝、大崩（大谷崩）、下草履（シモソウリ）、荒川三山と言われている山名も、前（荒川前岳）、荒川（中岳）、東衛兵万（東岳）であって岳の字は用いられていなかったようである。

南アルプス南部の山々の名前、現在では岳とか山が付いているが、昔は岳も山もつけずに呼びすてにしていた山々が多かった。特殊の山にのみ岳と嶽や山がつけられていた。当時の地図（昭和三年）を見ると、山、岳、嶽の付いた山は十指で足りるほどで数えられている。営林局、伐採・造林の会社の上部部の者、特に他県より転任者が多い場合は、一般的に山、岳、嶽を不用意に付けて呼んでしまったのが一般化したときか思えない。当時の井川村は三五〇戸一七五〇人の住民であった。これに対し山のほとんどが御料林、東海紙料（東海バルブ）、大河原組、加藤商社（木材）で占められていた。以上、小冊子の読了の覚書きとして。

今回、十一月十五日から十八日まで、キースタンのラホール市のパキスタン工業大学でおこなわれた、パキスタン国際電機工学会議にチエアマンとして招聘され、約二週間VIPとしてパキスタンを訪問する機会を得ました。この国際会議の開・閉会式、開期中に毎日催されたレセプション・パーティーの

席上等には、副大統領 Nurul Amine  
氏 J.A. Rahim、通商産業大臣  
Khar Yon-Nyap、州知事 Z.A. Ra-  
hmany、空軍指揮官等々のバキスタ  
ン政府の高官連が出席され、これらの  
高官連と席をともにする機会に恵まれ  
て、最近のバキスタンの国内事情、登  
山の見通し等について、若干、直接に  
話をする機会を得ましたので、その内  
容を報告します。

一口に言いますと、現在のバキスタ  
ンは国内の戒厳令は一応解除されたも  
のの、引き続き Emergency state (非  
常事態)の下にあり、外国人の登山は一  
切禁止され、この非常事態の解除され

およびスワート北部等への外国人の立入禁止措置も解除されることはまず絶対にならないこととした。特に副大統領等の話を総合すると、今回の非常事態は直接印パ戦争によるものではなく、印パ戦争、バングラデシュ独立、ブット政権の樹立と続くパキスタンの弱弱目についた状態下で、かねてより独立運動のきざしのあったカシミール地区が土侯連合による独立を企てたことによるものです。ブット政権樹立の時には、ブットとしてカシミールをいくつかの自治州として独立させると宣言されたものの、いまだそれは実行されて

おらず、各土侯が連絡して、プットウ  
権に對する反對党を結合し、眞つ向  
か對立して急激な獨立反亂運動を起  
した。これに對しバキスタン政府は軍  
隊を派遣し、幾つかの小戰爭の後に  
ギルギット・スカルドウおよびチトラ  
ル附近を制圧して、目下小康状態に  
あるというが今日の實状のように、  
ギルギット、スカルドウの飛機場の  
滑走路にはジェット戦闘機がずらりと  
並んでおり、ものものしい気配を感  
じました。このような山岳地帯の反  
亂は、單にカシミールだけでなく、  
インド、パキスタン、チベット、チ  
トラル、カイバ、峠方面に

でもハバナ谷を外国人入城禁止としたなど、動きが見られず。また十二月には印巴戦争の終戦処理の一つとして、印パ間でカシミールの停戦ラインの再確認がおこなわれる等の動きとなって表われ始めている。

十一月十九日からは、国際会議の主催で三泊四日のカイパ峠へのバス旅行が行われましたが、この際も、カイパ峠付近の山岳地帯の警戒が厳重を極めているのが印象に残りました。またアミン副大統領が一言も失礼した。「どうしてパキスタン国内の困難多難の時に日本人は山へ登りたがるのだから」

台北一時代から山好きで有名であった鹿野忠雄は、大正十五年に台北高校に入學した時には、もともと台北付近では登る山はなく、もっぱら三千五百m以上の高山二十六座をもつ台湾中央山脈に足を向けるようになった。高校一年のときは次高山付近を二十日間ばかり歩いたのとどまっていたが、二年に進級した昭和二年三月からは、山に入ってきたま、七十五日間学校の門をくぐらなかつた。そして試験のときちやつと顔を出しただけで、また鹿野の姿は高山方面に消えていった。

ど、ほとんど氣にもかけ、昭和三年には三月に次高山、南湖大山、七月には皇社大山を初登頂し、さらに能高越、蕎麥主山、南峰、能高峰に登り、八月には中央尖山の初登頂を果たした。高砂族は自分達と同じような姿をして、裸足で駆け回った日本人に眼を見はり、日本人登山者は鹿野とすれ違つても誰一人彼を日本人だとは思わなかった。鹿野は精力的に山を歩きまわつたが、こ

山と蝶のものがたり  
11

スーパーマン 鹿野忠雄

春田俊郎

し、番語を巧みに話、やがては高砂族と同様な服装で裸足で山を飛びまわることになっていたので、総督府でも呆れかえり、鹿野だけは許可証なしで入山を黙認するようになった。呆れかえったのは台北高校も同様で、鹿野の妻は試験の時以外はほとんど学校で見かけることなく、及落会議では常に話題となっていた。

昭和三年暮からは沼井鉄太郎（會員番号四九二番）と合歡山、畢祿山等々の間高砂族の言語、風俗、習慣を徹底的に研究する一方、台湾の水河地形を調査し、さらに台湾山岳地帯の昆虫を専門家以上に採集研究した。すばらしい学究でもあった。鹿野の登山スタイルと高砂族との違いは、捕虫網を常に持っていることであつた。

この間に台湾の蝶をことごとく採し、鹿野の新発見の蝶には、彼の名を冠した、カノミドリシジミ、カノロヒカゲ、新高山絶頂で採集したカウラナミジヤノメの三種があり、特カノクロヒカゲは鹿野が昭和三十一年に復帰した。

脈に入山した高樫悌吉(會員番号十四で、高樫の新発見蝶はタカムクシメがヨウ、タカムクウラナミジカノシロで、高樫の名を残す渡正監(五一番番で博物学同志会の頃からの山好き、好きで大正七年に渡台、登山した。(文中敬称略

大学の五名の教授連と会議期間中  
およびカイバー峠へのエクスカ  
ション・ツアーを通じて、大いに  
親交を深める機会を得たこと  
は、また別の一つの大きな収穫で  
した。

『山岳』覆刻版シリーズ  
好評発売中！

春田俊郎

台湾の蝶で忘れてならない人がある。二人いる。一人はまだ台湾の登山な

中華人民共和国の北京大学、青華

大学の五名の教授連と会議期間中  
およびカイバー峠へのエクスカ  
ション・ツアーを通じて、大いに  
親交を深める機会を得たこと  
は、また別の一つの大きな収穫で  
した。

『山岳』覆刻版シリーズ  
好評発売中！

第二年第二号は五月発売予定。



# 本元

## 飯 豊 山

藤 島 玄

会津には、神社の飛来伝説が二つある。二つとも越後と会津の国境にある高山である。御神楽岳（一三八六m）から三二km飛んで御神岳（二七四四m）へ、さらに八km飛んで、会津高田町伊佐須美神社（二二二m）鎮座である。次は一桁スケールが大きい。低きから高きへ進んでいる。本元飯豊山（約六五〇m）（五万分地図若松）から元飯豊山の飯森山（一五九五m）へ五〇km飛び、さらに二〇km飛んで飯豊山（二一〇五m）鎮座である。ただし、本元飯豊山、元飯豊山、飯豊山の三角関係の脈絡を今のところ辿ることはできない。本元の方は直接飯豊山へ八〇km飛んだ、元の方も飯豊山へ飛んだといっている、元と本元の関係は杜絶しているようにみえるが、これらは地元山岳会の研究で発掘できるところ。飯森山と飯豊山の関係は早くから知っている、資料を揃えて後で発表する。伊佐須美神社の方は、御神岳を

訪れた機会に書く予定である。

今西錦司氏一行四名が南会津入りしたので、越後から私と鈴木敏雄君が参加して、十月八日に七ヶ岳（二六三六m）に登った。終戦直後、中山峠から丸山（一五〇四m）へスキーで登って以来の山である。羽塩から約八五〇mの喜三郎小屋まで車が行き、程窪沢の浅い滑沢を辿りつめて、後一投足で一等三角点の頂上である。飯豊、那須から日光、尾瀬の山々が、燃えあがり紅葉の上に指呼され、北の越後の山脈だけが遠かった。七ヶ岳の北端まで新登山道が伐られ、岩峰は七つなんてものでない。そこで、子、丑、寅、卯と命名していくと、今後は七ヶ岳が十二支岳になりそうになった。

次の日の一行は、大川右岸の大戸岳（一四一六m）登りとなった。そこらは会津山岳協会の人たちに委せて、われわれ豊島洋一君を加えた三人となりかねて市村貞夫君から報告のあった本元飯豊山を訪れ、大戸町入ノ小屋で別れた。加藤光雄氏宅に上がりこんで、いろいろ関係資料を見せただいいて案内してもらったことになる。本元飯豊山は、村の北東の高畑山（九四三三m）独標の中腹、岩記号のすぐ上にあり登山道は明瞭だが、途中の

畑道など迷路が多いので案内はあったほうがよい。鹿熊沢の大戸林道標柱まで車、十時四十五分に出発して、二つくらゐ、車の古タイヤが捨ててあるところから右へ桑畑の中に入ると、間もなく小沢の姥権現へ出れば一本道となる。三ノ鳥居、御沢と杉林を急登の後、巨岩の積み重なった中を登れば、若木権現、弁才天の木札を見る。剣が峰は短い草稜、凝灰岩に角礫が散点している。草稜に当る高畑屋へ出る。横に広く四〇〇m、高さ一五五m以上、大小の神仏の木札が多い。下がれば御裏大黒、すぐ五mの木梯子に鉄鎖が下がっている。岩峰の左を捲くのが御秘所権現、出ると飯豊山神社であった。

神社は一間×二間半の細長い造り金鉢大権現のお札、梵天などが納めてあり、上はのしかかるような凝灰岩の穴の多い巨岩である。正午になったので、正面の大戸岳を眺め、神社の右の尾根を切る峠から一目散に下った。沢で葎を採って大戸林道へ戻り、安政二年の飯豊山碑を見て、加藤家で昼食をした。お札など刷つてもらいながら伝説を聞く。

飯豊山に姉妹の山神がいた。思案岳（八七四四m）の池で蓮華の花の咲かせ競争をした。妹が早く起きて行って、姉の花が咲いたのを折って、自分のところに差した。姉はそういうふうつきは北へ行けと命じた。そこで妹は今の飯豊山へ飛んで行った、という。現在九月八日がお祭。九月一日に道刈りして、七日が宮宮で終夜飲み明かすのこと。そのときかける掛軸を参考までに示すと、現在の飯豊山の神仏のすべてが書きこまれていた。（四七・一二・一五）

## 武田久吉著作展

### 出品目録・解題（抄録）③

——雑誌——

#### 『博物之友』 日本博物学同志会

この欄では主要な報告のみをあげるにとどめます。詳細は日本山岳会所蔵の雑誌をごらんになるか、筆者に問い合わせ下さい。

二卷（明治三十五年）七号から十五号植物雑誌（一）から（五）および（五の続）二卷、十一号から十三号

早春の日光山（一）——（三）

三卷（明治三十六年）十六号から十九号、四卷三十三号、および五卷二十六号

北米の春草（一）——（六）

四卷（明治三十七年）二十一号

清澄山道中案内記

五卷（明治三十八年）二十四号から二十六号、及び六卷三十号、三十一号

八ヶ岳の高山植物帯に就て

五卷二十五号から二十九号

戸隠山及び妙高山植物採集記（河田黙と共筆）

五卷二十七号

秩父植物採集の記

六卷（明治三十九年）三十号

尾瀬採集の植物を記す

六卷三十二号

八ヶ岳甲州方面の植物に就て

六卷三十三号

富士山を越ゆるの記（上）

六卷三十五号

シラネニンジン等に就きて

七卷（明治四十年）三十九号から四十二号

札幌通信（一）——（三）

七卷四十三号

南部日本アルプスの植物

七卷四十七号

高山にて得たる二、三の蝶に就いて  
八卷（明治四十一年）四十八号  
ヌタカムシニペ山の植物に就きて  
八卷五十七号

富士山を越ゆるの記（中）

九卷（明治四十二年）五十八号から六十九号および六十八、六十九号

北海植物増談（一）——（六）

九卷六十一号

富士山を越ゆるの記（下）

武田久吉氏が『山岳』に寄稿された文はかなり多いが、ここでは『山岳』本欄の文章以外は省略しました。

第一年一号（明治三十九年）

尾瀬紀行

第一年二号（明治三十九年）

甲州八ヶ岳

白馬岳龍城記（河田黙と共筆）

第一年三号（明治三十九年）

白馬岳龍城記（河田黙と共筆）

第一年二号（大正二年）丹沢山

第一年三号（大正五年）

日光遊記

第一年三号（大正六年）

霧ヶ峰と鎌ヶ池及八島ヶ池

第一年一号（大正七年）

高山植物の研究

第十三年一号（大正七年）日光山の瀑布

第十三年三号（大正八年）雁ヶ腹摺考

第十五年一号（大正九年）

多摩川、相模川の分水山脈

第十九年一号（大正十四年）尾瀬再探記

第二十一年二号（大正十五年）仙元峠付近

第二十年一号（大正十五年）

日川溪谷の濫伐と保護運動

第二十年三号（昭和二年）

飯豊山に登る

第二十二年一号（昭和二年）

岩手山御苗代付近の地形について

第三十一年一号（昭和十一年）

山岳会の成立するまで

（春田 俊郎）

（完）

## 平ヶ岳の思い出

土橋進一

会報三二五号に、故武田久吉氏が寄稿された「平ヶ岳瞥見記」は多くの会員に感銘をあたえたが、昭和四十六年七月、筆者はたまたま先生に同行し、その時の記録を同好会誌に発表した。このたび編者の依頼により、植物目録を除きご報告申し上げることにした。謹んでご冥福をいのります。

七月十八日、どしゃぶりの中を小野正喜氏のご好意の車で、駒止湿原に向

い茶屋の中村氏の所で軽い朝食後、四人で湿原に入る。車道より開拓地の分岐点までの自然の荒廃は目をおおしめる。ふと、尾瀬三平峠の車道工事で荒れ果てた岩清水付近を思い出す。しかしこの湿原は、早くから中村氏始め地元や福島の方が保護して下さっているのだから、アヤマ平の如くならずには木道がひかれた事は素晴らしい努力だと思ふ。やはり唯慨嘆しているばかりでなく自らその保護に努力すれば、その意が通ずる事ができるのだらう。湿原は数年前に比べて大谷地中央部付近までヨシ、コバイケイ等が侵入して道路工事の泥が流入しているのではないかと思われる。小野氏に松枝校まで送っていただき、宿を旅館ひのえま

にとる。

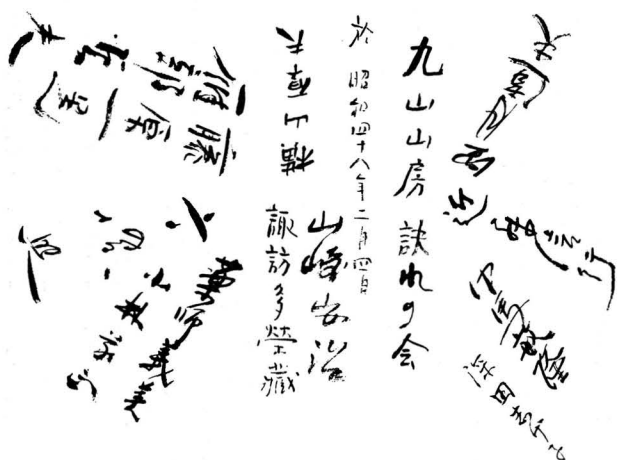
十九日、小雨のため松枝校の文化財等を見て回る。武田先生の民俗学にご造詣が深いのを今更のように驚く。二十日、ヘリコプターが九時頃御池に飛来するとのことで旅館を立ち御池で待機していたが気流が悪く中止。重兵衛池とその湿原御池田代等をみる事にす。喜代一君の車で重兵衛池入口まで参り、同君の協力で先生を無事に池の周囲の湿原にお連れできた。このあたり車道ができてから却って人氣がなくなり自然の復元が著しい。今まで気がつかなかったが湿原のほんの一角に限り、ナガバノモウセンゴケとサジバノモウセンゴケがあった。珍しい。池の畔りの小高くなった所にも小

## 九山山房訣れの会

深田久弥さんの三周忌を前にして、かねて九山山房主がおたのみしていた『ヒマラヤ関係図書目録』（葉師義美編）が上梓され、雪前にささげられ、編者の上京の折、同志が参集して、本がなくなった山房とし訣れと山房を閉じる集いを行った。八冊におよぶ来訪者芳名録を眺めながら、メートルがあがったところで筆をとり、名をとどめことにした。

この本で一番ご苦労をなさった奥様は、席のあたたまることなかったのは申訳なかった。目録は別の機会に云々されよう。帰りの車中、一人になって、深田さんがこの本をながめられたならば、眼を細くして、吐息をもらされ、悦ぶお顔を思い浮べた。

(田中栄蔵記)



が一望だ。眼下には幻の大池がある。約十分順調に山頂着陸。ヘリが飛び去った後で車輪の跡を調べたが全然見当らず、意外な程に乾いていて土地は硬い。乾草原のようだ。池の岳に向って出発した。大勢が歓声をあげながら花を見、写真を撮る等のためはかどらず、遂にはへりの迎えの時間に間に合いうらないので、若い人は姫池へ、先生と私はゆっくりと花を楽しみながら、山頂地点に戻る事にす。先生の歩みは先年の時と同じく、ゆっくりと進まれる。が、その眼差しは実に鋭く、花、草、樹木をとらえる。カメラが出るシャッターがきられる。メモされる。その動作は確実な程の繰り返しである。山頂付近の湿原は大部分乾燥して、しかもその所々に針葉樹が侵入している。これは水蘇湿原から次第に針葉樹林に移行しつつある過程のようである。勿論相当な数の植物もあるようだが尾瀬の方面に比較すると、その種類は少ないように思われる。やがて皆も戻って来た。そろそろ迎えの来る頃か。はるか麓岳の南方に小さくキラリと尾瀬沼がひかる。御池に帰着後、今度は長池湿原に出掛ける。全く先生はお元氣だ。精力的な程のご活動だ。この湿原は水分乾燥して来ているので、その全てにヨシが生えていたが、一部にはモウセンゴケその他の湿原植物も多々ある。コアニチドリ、ヤナギトラノオ等珍しい花も見受けられた。コアニチドリは先生も数十年振りでのこの山でご覧になったとかで、私もここまでお供をして来た甲斐があったと思ふ。二十二日、再び雨となる。喜代一君に車で鬼怒川まで送ってもらい、緑の尾瀬、会津、越後の山から公害の東京へ向った。

△平ヶ岳山頂付近・裏麓御池付近の湿原植物等の目録は『植物と自然』第六巻第九号に発表されている。▽

## 漢拏山をめぐる話

佐々木 四十臣

漢拏山は、韓国の済州島に聳えているすぐく雄大な山で、戦前からわが国ではカンナ・サンとかハナナ・サンと呼ばれて親しまれて来た山である。実はこの山は現地読みでハルラ・サンと呼ぶのが正しい。標高一九五〇mは韓国では最高峰である。

ところが、この標高のことで大問題が起きている。というのは、この山の高さが本当は二千mを越えているというのである。

韓国の山岳雑誌『山』を読んでいたら大意次のような記事が載っていた。「漢拏山は、今では一九五〇mとされているが、最近の調査は二〇二二mであることがわかった。これは一九一五年の測量で一九五〇mとされていたが、最近日本からの調査隊が高度計で計った二〇二二mあることがわかった。韓国に二千mを越える山があることは、わが国の誇りである。」

智異山や雪岳山も、そういう意味でははつきりしていないので、この二つの山も正確に測れば、もっときちんとした高い高度が出る可能性がある。」

(『山』72・7月)

といった内容の記事である。記事の中にもあるように、残念ながら漢国には二千mを越す山はない。本題の漢拏山一九五〇mを筆頭に、智異山一九一五m、雪岳山一七〇八mとつづいている。二千mを越す山はすべて停戦ラインの北に位置しているわけで、漢拏山の標高が二千mを越すかどうかはやはり大問題といわなければなるまい。さて、このついでなので漢拏山についていまいし書いてみよう。登山史

上で漢拏山の記録として忘れることができないものに、京城帝大パーティ（リーダー泉靖一）による積雪期の初登頂がある。初登頂は一九三六年の元旦に果たされている。前年の十一月頃にできた蟻頂小屋（現在は竜鎮閣）を基地に活動がなされたようである。ところが不運にもメンバーの一人である前川智春氏が、一月二日下山の途中小屋の付近で遭難してしまった。

またこの山は、一九四八年四月三日に起きた四・三事件のため、一九五六年まで登山が禁止されていた。この事件では島民のゲリラは山中にたてこもって、政府軍と激しい戦闘を行なったそうである。

戦後日本人がこの山を最初に訪れたのは九州朝日放送山岳部パーティ（一九六六年三月二十二日）で、つづいて大分登高会パーティ（同三月二十六日）姫路工業大学ワングル部パーティ（同三月二十七日）となる。最近ではわが国からも多くのパーティが漢拏山をめざしている。これに果たして標高が二千米を超えるとなれば、また一層人気が高まることは必至であろう。

## 犬橈の旅・その後

植村直己

インド山岳会のエベレスト・ミートイングの招待状同封の便り二月二日ありがたくシオラバクにて拝見。

犬橈と共に極地ゼロメートルの海水上でエベレストの話を開けば耳がたつ今日ですが、今回は参加できません。五月は北極海の犬橈旅からシオラバクへ帰った頃か、旅の途中かと思われ、極地の旅をきりあげてミートイングに参加するのは現在の私にはとても無理なことですのでご了承下さい。も

ちろん、インド山岳会へは手紙をかくつもりです。

北極に近いここ北西海岸では毎日マナス（三〇度前後の気温、海水は一・一五m。一夜で二・三〇cm近い降雪をみて、内陸から吹き出す風のために一瞬にして吹きとばされてしまいます。人々はアザラシやセイウチ狩りの準備に槍を作ったりして日の出を待ちますが、私などは日の出を待ちきれずフィヨルドから外海の新しく凍りはじめた薄氷の上へセイウチ狩りにとびだしたり、沿岸の山をわたり歩いて兎とりなどをしています。

こうして、一月は沿岸氷上を八〇〇kmばかり走行。二月三日には、南部ウバニックの町へ往復二千kmの旅に出ます。チューレアメリカ基地の南部では海水が切れ、海面が出たとの情報が入ったりしていますので、果たして計画通り行くかどうかかわりません。だめなら直ちに引返し、カナダの旅へ出るつもりです。生肉をたべ、レインダー、白熊、アザラシ等の毛皮に身をつみエスキモーと同じ生活こそしている私ですが、犬橈技術やセイウチ狩りの技術となると、未熟な故に「カッドゥナ」（外国人）といわれてしまいます。今は何となく落ちつかず犬橈にかまれています。正直いって今年の方向が定まらぬ心境です。ここで犬橈をやってみてからというものは、グリーンランドの沿岸氷に興味をもつようになつて参りました。南極へのはかない夢もいつ咲くものか……。どうしても私の力で南極へ入れない時は、もう一度このグリーンランドの極地でさらに旅をつづけ、何かやってみたいとも考えるようになってきました。

お便りありがとうございます。

二月二日

Storapaluk, Thule, Greenland

（三田幸夫宛）

## 幻の花のふるさと

京丸谷

坂倉登喜子

天竜川の支流、気田川の源流にある京丸谷は、幻の花京丸ボタンの伝説で知られる山奥の秘境で、静岡県周知郡春野町の山中に残る。平家の落人の村がそこにある。

幻の若京丸ボタンはいまもって不可解な伝説の中の謎の花とされているが京丸谷のガケの上に六十年前に一度咲いて、直径一尺ほどもある傘の形をしたボタンらしいその花が、流れてきたというところである。

しかしそれ以来その白い花は咲くことがなく、幻の花を求めて京丸谷を探った鳥居安史の記録にもその結論は出ないままに終わっている。

何というふしぎな山の物語だろう。そのナゾの花が昭和四十八年に六十年目がきて咲くという。しかしこの花が咲くと凶事が起こるといふ伝説が真実ならば、京丸ボタンは咲かない方がよいだろう。

いつまでも幻の花として、夢の中に白く大きく咲いていることの美しさを永久に消えさせたくはないからだ。私は浜松に住むいとこが、朝日新聞に連載されていた記事を予備知識を得るために送ってくれたので、早速読み始めたら、面白く興味が湧いて一気に読了した。しかし気になるところが多つた。曇り日や雨気のある時はヒルが多いこと、京丸部落にはヘビが住むという、そして女のひとりたが

が住むという、そして女のひとりたが気味悪であった。さて三河の鳳来寺の山麓にいとこたち大勢の集いが催された翌日が京丸へ

行くことをすすめられた日であった。

幸い親戚で植物に興味のある高校三年の学生さんが急に同行してくれることになり、その前後地図と参考書を囲み準備打合わせを行なった。

翌日は気田から先乗物がないので、石切の谷奥まで入るため、いとこの車で登山口まで送って貰った。

京丸への入口には指導標がなく、とにかく対岸に岩伝いに流れを渡ることが間違いないので、車道の終わる地点から渡ると、急なこり道に入ったがこれは正道でなかった。（本道はずっと手前の小山小屋の左脇から溪へ降る）

山への登山路に出た頃は、すでに日没間際となり、ここまで来た以上、屋根一つ距てた京丸村へは頂上近い肩から下るのが安全ルートであると思つた。

しかし途中で暗くなり部落近くの溪間に降り、心細い思いでとにかく腹ごしらえをしようとして夕食をとった。すると急に元気が出て、元の岩壁をよじると、ふしぎにも平らな道が京丸部落へ私達を導いてくれた。

平家の落人が只一軒残っているという京丸部落に近づく、畑で自給自足する生活のための平坦な一角に農家があった。戸をたたいたが人がなく、呼べど答えぬ静まりかえった藤原忠教家の留守宅と、点在する廃屋の無気味な沈黙……。小さな塚を見て、「あき首塚……」というT君の声を胸をときどきさせてさまよった。京丸村の丘の家や塚山は暗夜のじまの中に包まれたまま、疲れはてた山女と植物研究家の玉子をあたれたかいらりのぬくもりと

藤原十七代目といわれる忠教氏宅へは連絡して置いてくれた筈なのに、誰もいないのは、急用で下山されたのであろうか、とにかく裏口から入るようになっていたのでその夜は夜露をし

のぐことができ、京丸探訪者名簿に記入してお礼の名刺を置いて泊した。

それにしても藤原家の伝承をたのしみにして訪ねて来たのに残念ではあったが、とにかくここまで来たことだけでも再訪の糸口になる。伝説の地を踏み、土に触れた喜びを後に、帰路は正しい登山路である洞木沢径をとった。京丸の家を後にして間もなく、地元の人らしい若い衆が五、六人石切から登って来た。「京丸山へ登るのですか」と声をかけると、「まむしとりに登って来たのですよ」といって、一人の男が皮をむいたばかりのまむしを枝にさして見せてくれた。私は道から外れて林の中へ逃げ顔をそむけた。

そういえば登りでヤブこぎをして小さな沢の源頭に出た時、赤茶色のへびを見た。あれはきつとまむしだったのだらうか、頭をじっとこちらへ向けて動こうともしなかった。

そして後側をトラヴァースして逃げたことを思い出してぞっとした。

京丸への正統ルートはよく踏まれた道ではあったが、三km登り三時間の行程で、百八坂の急坂は降りでもうんざりするほど急であった。

最後の谷におりると大きな滝があつて木の橋で対岸に渡ると、石切川の車道までは近かったが、植物採集したりのんびり休んだりして車道に出たのは十時半頃、そこから一時間歩いて電話のある石切の売店を道の左下に見つけ気田から電話で車を呼んで貰った。

ここから袋井行のバスが約一時間置きに出ているので、二時頃のに乗り浜松に戻った。山の粗食に過ぎぬ二日間、体力挽回と、夕食には名物のうなぎを馳走になり、スリルに富んだ京丸谷でつて作ったあさを京丸しほりなどといやかされ、無気味な夜のヒル谷や、まむしの住む村の土産話にふけた。

昭和四十八年がちょうど六十年目に  
あたる花の咲く年で、シロヤシオの群  
落が、さてはヤマボウシではないか、  
いやな京丸シタナゲだという諸々の  
花への説はさて置いて、秋色の京丸谷  
には伝説の中に生きる、しめっぽい静  
けさが残されているようで、紅葉とき  
この頃、もう一度訪ねたいものと、  
閑人になった私のねがいは、六十年目  
のさわめきが終わった頃になりそうで  
ある。

## 北穂集中登山

を顧みて……

沼倉寛二郎

やはり徳本峠から穂高の眺望は随一  
でなからうか。入山中はまたとない晴  
天に恵まれ、そのうえ錦おりなす峠一  
帯は朱に燃える紅葉のすばらしさに感  
嘆する。さらに唐沢はすばらしく、豪  
華な紅葉のアーチで歓迎をうけた。

興銀山岳部創立四十周年記念山行  
(十月五〜八日)にふさわしく、一〇  
三人の多数が参加、わが山岳部史上に  
残る画期的な行事となった。

こうしたことは今後不可能かも知れ  
ない。このおそれれた企画と若さの流  
れにどうしてもさかえきれなかった  
ことはおしめされたが、一部修正により  
慎重に行動したことが、まれにみる快晴  
に恵まれたことが成功の原因と思う  
もし天候がくずれていたら……今思っ  
とぞつとのである。

一班一〇人の内二人程度が男性で他  
は山なれぬ女性の構成であったが(奥  
穂岳沢班一八人、唐沢班一七九人、  
蝶常念班一八人、山岳班一七九人、  
一人の落伍者もなく一〇三人が無事上  
高地に集結したことは快挙でもあっ  
た。しかしながら、このたびの実力以

上の計画に対しては、私自身は深く反  
省している。指導層に薄く職場団体に  
もかわらず、かくも多数がこの地域  
に入ることがいかに至難なことである  
かは、昭和六年に当山岳部を創立して  
いらい歩んできたものにとっては、一  
方で喜びもまたひとしおであった。

思うに、大学山岳部を終え、入社後  
各人が、職場山岳部でどれだけ行動し  
ているかは疑問である。ここに職場団  
体が経験の深いこれら岳人を待望して  
いることを銘記したい。

かつて、山岳会に東京支部が存在し  
ていた頃、大学山岳部団体と同様に職  
場団体にもあつたことがあつて、たが  
い横の連絡をとりながらその発展にい  
ささかなりとも尽力したことを思う。  
この機会に、わがわが山岳会がもう  
一度指導層の薄い職場団体に呼びかけ  
その発展のために育成されんことを希  
望したい。

## ▼集会委員会より▲

今年(昭和四十七年度)の集会委員  
会は、例年とはちがって、若い委員  
中心に毎月の集会をおこなってきた  
た。私もこの仕事を担当した以上、自  
分のおもふ存分に計画をすすめたいと  
おもい、意識的に若い人をえらび、そ  
れぞれの役割において実務を担当して  
もらってきたわけですが、ようやく一  
年が過ぎようとしている現在、山岳会  
運営のなかで、活動的な行事がおこな  
えたとおもいます。

しかしながら集会委員会担当の私が  
弱年で経験の浅かったこともあって  
いくつもの失敗をかかされたこともあり  
ました。自分ながら困ってしまうこと  
もしばしばでしたが、そんなとき、委

## 吉沢一郎氏

本会へ図書寄贈

十二月二十六日の夜、近藤信行氏と  
共に滝野川の自宅に副会長を訪ね、貴  
重な蔵書の中からスマイスの著作等二  
十五冊をいただきました。厚くお礼申  
し上げます。

書齋での話は、一九一〇年代にチ  
ットのツァンボー河やブラマープトラ  
河を中心に東部ヒマラヤの探検やチ  
タル付近を探索した英国陸軍大佐ハ  
ー伝、一九三三年の英国エベレスト隊  
に参加している駐エチオピア大使であ  
った陸軍大佐ブーステッド伝など、日  
本人にはあまり知られていない先達の  
ことに話が及び、楽しい一夜でした。

(山本良三)

## 《寄贈図書目録》

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>F.S. Smythe 著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. The Kanchenjunga adventure. London, Victor Gollancz, 1930.</li> <li>2. Climbs and ski runs. Edinburgh, William Blackwood, 1931.</li> <li>3. Kamei conquered. London, Victor Gollancz, 1933.</li> <li>4. An alpine journey. London, Victor Gollancz, 1934.</li> <li>5. The spirit of the hills. London, Hodder &amp; Stoughton, 1935.</li> <li>6. Over Tyrolse hills. London, Hodder &amp; Stoughton, 1937.</li> <li>7. Peaks and valleys. London, Adam and Charles Black, 1928.</li> <li>8. The mountain scene. London, Adam and Charles Black, 1938.</li> <li>9. A Camera in the hills. London, Adam and Charles Black, 1939.</li> <li>10. The adventures of a mountaineer. London, J.M. Dent, 1941.</li> <li>11. Alpine ways. London, Adam</li> </ol> | <p>and Charles Black, 1942.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>12. The mountain vision. London, Hodder and Stoughton, 1942.</li> <li>13. Over Welsh hills. London, Adam and Charles Black, 1945.</li> <li>14. British mountaineers. London, Collins, 1946.</li> <li>15. Snow on the hills. London, Adam and Charles Black, 1964.</li> <li>16. My alpine album. London, Adam and Charles Black, 1947.</li> <li>17. Rocky mountains. London, Adam and Charles Black, 1948.</li> <li>18. Swiss winter. London, Adam and Charles Black, 1948.</li> <li>19. Mountains in colour. London, Max Parrish, 1949.</li> <li>20. The valley of flowers. New York, W.W. Norton, 1949.</li> <li>21. Climbs in the Canadian Rockies. London, Hodder and Stoughton, 1950.</li> <li>22. Mountaineering holiday. London, Hodder and Stoughton, 1950.</li> <li>23. Again Switzerland. London, Hodder and Stoughton, 1952.</li> <li>24. Camp six. London, Adam and Charles Black, 1956.</li> </ol> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 本年度年間計画

定例集会(毎月二十日)

いする責任を自覚している点、私は素  
直な気持ちで彼らをほめてあげたいとお  
もいます。(神崎忠男)

五月(日) 集中登山(奥多摩大岳山)

六月(水) 岩登り技術について

七月(金) 遠征報告

九月(木) 遠征報告

十月(日) 現地小集会

十月(未定)映画会

十一月十五日(木) 雪崩シンポジウ

ム

十二月(木) 忘年会

一月十三日 スキー懇親会

(八方尾根)

## ルーム便り

会員サービスの一環として、本会ル  
ームではクラブ・タイ四種(値段はい  
ずれも二五〇円)とくにアングリー  
レッドが好評です。をはじめ、委託山  
岳図書や『山岳』覆刻版(第一年二、  
三号、第二年一号がまだ若干あります)  
をとりそろえて皆様のおいでをお待ち  
しています。(事務局)



## 図書紹介



宮下啓三画

## 自然と旅の原点

岡田喜秋著

第一部『自然の原点』において、著者は、ふつう自然と呼んでいる景観の中に植林美や人工の加わった自然も含まれているから、これらは第二の自然と呼んで、真の自然と区別することから出発している。そして、自然破壊の元兇は日本人の心の中にあり、日本人の風景観は、景観を眺めながらその中に都会的雰囲気を持ちこむ欠陥を指摘する。流行歌『知床旅情』の歌詞「飲んで騒いで丘に登る」というのが、日本人の観光と嘲笑している。その上、日本人は自然を私有したが、人の少ない秘境を見つけると、誰にも教えないで、一人でにやと楽しむ悪習を批判する。自然環境をすべて自然のまま保護しようということは無理であることを知った上で、著者は観光が観光資源と呼ばれる収入とするようなことでは、とつてい保護は不可能で、旅行者と受入側の相互関係をもっと研究すべきであると強調している。

第二部の『旅の原点』では、まず、旅には元来、性格と気風と個性があるべきなのに多くの人はそれに気づかぬ点、多くの人は人達がコモーションリズムに

踊らされて商業観光地のみに「足を向け、それを誇りとする点を指摘し、日本人のレジャーはまだ虚像の段階であると断言する。だが最近では個性的な旅が芽生え始め、何かを見つめる旅、異質の土地に触れる旅などが現れて来たことを歓迎する。一方、家族旅行などの楽しみ方が未熟であり、何かを見つめるといつでも「事あれかし」と願う弥次馬根性が拭いきれぬ現実に、著者の慨嘆がある。

このように書くところ、いかにも堅苦しい「旅」の教科書、道徳書のように見えるが、随所に日本の古典を引用し、また外国人の旅行観を述べ、一応、すんなり読める読み物となっている。著者は旧制松本高校山岳部OBで、元雑誌『旅』の編集長。(春田俊郎)

昭和四十七年十月 P.H.P.研究所刊  
本文二五三頁 定価六六〇円

## 満蒙紀行

飯塚浩二著

東大名譽教授だった飯塚さんの遺著。戦争末期に、日本の植民地支配や占領行政を自分の眼で見ておこうと、当時の満州、華北、蒙疆を広く歩いた視察報告である。

山や山登りには関係のない本だが、敗色濃いあの時代に、本会のつわものたちが、あちこちに腰を据えて泰然としている姿が、巧まらずに物語られている点で、なかなか面白い。

新京に松方三郎、北京に伊集院虎一、張家口に今西錦司、加藤泰安といった面々が登場するので、会員諸氏にとっては内容とはまた別な魅力が感じられるだろう。(島田 異)

昭和四十七年九月 筑筑書房刊 A  
5判 本文二九五頁 定価 二二〇円

## ネパールの伊藤博文

佐藤達夫著

会員の佐藤さんからは「植物誌」らしい、すでに数冊の新著が本会へ寄せられている。あまり植物の本ばかり出しているのと花屋が専門かと思われかねない、今度は本来のお家芸のほうで憲法随筆と銘打って一書を上梓された。その表題となった一文が巻頭に掲げられているわけだが、博文と著者が見立てている人物は、昭和三年に憲法研究のため来日した、当時のネパール王国宮内庁長官ロク・ダルシャン氏なのである。

この名を懐しく想い出す会員諸氏はきつと少なくないだろう。三田さんもその一人だし、マナスル以来あれこれと世話になった遠征隊員にとっても、ダルシャン・山・憲法といったら三角関係は、意外な興趣を呼ぶのではないかと思う。(島田 異)

昭和四十七年十月 啓正社刊 B6  
判 本文二二五頁 定価 四四〇円

## カナディアンロッキーズ

登山報告書

日本学生カナダ登山隊

この隊は、専修、駒沢、東海、国学院、中央の五大学の山岳部の学生三名と二名のOBからなる混成登山隊である。気の合ったこの連が、ライトエクスペディションをやろうということを選んだのが、日本の登山界にはもともと因縁の古いカナダのロッキーズであった。多少ともロッキーズに関心を寄せ

ているものにとつては大変興味をそらせられる報告である。

この報告書は荒井、芦川、斎藤、石塚、黒川の五君からなる一行が一九七二年の六月二十一日から九月五日まで二ヵ月半にわたる登山の概要を分組執筆したもので、読んでみると、正に疾風枯葉を巻くような勢いでロッキーズの連峰のうち十二座の登頂に成功している。と言つても、その登山はそう生易しいものではなく、日本の山とはスケールも違ふし、夏とは言え吹雪や氷河雪崩に脅かされたり、時にはマウンテン・ロブソンのように二十七日間にもおおよしい登山行動を余儀なくされているものもある。手中におさめたのはランドル峰、ヴィクトリア峰、コロンビア峰、リトル峰(テンピークス山の第二峰)、トウィンズ峰、アザバスカ峰、ロブソン峰、エディスキャベル峰、その他で堂々たる成果といつてよいだろう。

叙述は飾り気がなく読んでいて好感がもてないことはないが、何んといふことか実に誤植が多いのが眼ざわりである。一ヵ月やそこらをいそいで出す必要もないこの種の報告書に、たとえ非売品とはいえどうしてこのように粗雑なことをやるのだろうか。外国の山名や地名などはとくに正確に書いてもらわないと、読む者に誤解を与えることになる。あえて苦言を提しておきたい。

しかし、カナダの山の登攀の面白さを紹介すると共に、自動車をフルに利用することによって数多くのピークの登頂を可能にさせる、ロッキーズ独特の山登りの仕方を若いエネルギイの結果により実現させた成果の報告は、今後この種のライトエクスペディションを試みようとする者へのよき刺激となる。

(織内信彦)

昭和四十七年十二月刊  
三〇〇部限定 非売品

## 図書室便り

(昭和48・2)

## 新刊図書受入報告

- 実業の日本社寄贈  
1 串田孫一著『若き日の山』 昭和47  
二見書房寄贈  
1 芳野満彦著『山靴の音』 昭和47  
茗溪堂寄贈  
1 日本山岳会東海支部編『遙かなる未踏の屋根』 昭和47  
八王子ヒマラヤ登山隊寄贈  
1 八王子ヒマラヤ登山隊編『ガンガブルナ』 昭和48  
佐藤達夫氏寄贈  
1 佐藤達夫著『ネパールの伊藤博文』 昭和47  
塚本宏氏寄贈  
1 霧の旅会編『霧の旅 第15号』 大正14  
2 霧の旅会編『霧の旅 第8号第3号』 昭和2  
3 霧の旅会編『霧の旅 第11年第33号』 昭和5  
4 霧の旅会編『霧の旅 第11年第34号』 昭和5  
5 霧の旅会編『霧の旅 第12年第35号』 昭和5  
6 霧の旅会編『霧の旅 第12年第36号』 昭和6  
7 霧の旅会編『霧の旅 第13年第37号』 昭和6  
8 霧の旅会編『霧の旅 第14年第40号』 昭和7  
9 霧の旅会編『霧の旅 第15年第43号』 昭和9  
10 霧の旅会編『霧の旅 第15年第44号』 昭和9  
11 霧の旅会編『霧の旅 第15年第44号』 昭和10  
12 霧の旅会編『霧の旅 第16年第46号』 昭和10  
13 霧の旅会編『霧の旅 第16年第48号』 昭和10



- ―』 昭和11
- (14) 霧の旅会編『霧の旅―第17年第49号―』 昭和11
- (15) 霧の旅会編『霧の旅―第18年第51号―』 昭和13
- (16) 霧の旅会編『霧の旅―第18年第52号―』 昭和13
- (17) 霧の旅会編『霧の旅―第19年第53号―』 昭和14
- 日本山岳会
- (1) 日本山岳会編『山岳―第2年第1号―〔覆刻版〕』 昭和48
- (2) 日本山岳会編『山日記』<sup>73</sup> 昭和48購入
- (1) 吉田武三著『定本松浦武四郎・上』 昭和47
- (2) 吉田武三著『定本松浦武四郎・下』 昭和48
- 定期刊行物受入報告
- 〔部報・会報〕
- (1) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 69 (48-2)
- (2) 日本地図資料協会『古地図研究』 No. 36 (48-2)
- (3) 京都山岳会『京都山岳』 No. 574 (48-2)
- (4) 名古屋山岳会『月報』 No. 28 (47-11)
- (5) 尾瀬の自然を守る会『尾瀬ニハース』 No. 11 (48-2)
- (6) 長野県山岳協会『山岳協会ニハース』 No. 27 (48-1)
- (7) 日本自然保護協会『自然保護』 No. 127 (47-12)
- (8) 低く山を歩く会『低く』 No. 92 (48-2)
- (6) 神奈川県山岳連盟『ときわ木』 No. 31 (48-2)
- (10) 日本山岳協会『特別事業報告書』 (47-1)
- (11) 日本山岳協会『登山月報』 No. 47 (48-2)
- (12) 日本登山協会『山々』 No. 178

(48-2)  
【雑誌】  
(1)『アルプ』No. 180 (48-2)  
(2)『岳人』No. 309 (48-3)  
(3)『山と溪谷』No. 414 (48-3)  
(4)『創文』No. 114 (47-12)  
【その他】  
(1)日本山岳会石川支部『ヒンズークシ  
ン登山報告書ディリッチミール』<sup>71)</sup>  
(2)山口大学山岳会『スワート・コヒス  
タン遠征隊報告書』<sup>67)</sup>  
(3)山口大学山岳会『ガネッシー・ヒマ  
ール偵察隊計画書』<sup>73)</sup>  
(4)尾瀬自然保護研究会『おぜ』No. 111  
(48-2)

『ヒマラヤ』著者の立場再び

私の作品集『ヒマラヤ』について再び  
納得のいかない点があるとして、葉  
師義美氏が本誌三二九号に私見をのべ  
られていた。以前にも書いたように監  
修の深田久弥氏はすでになくなり、深  
田氏を補佐した五百沢氏が現在ネパ  
ールを旅行中で私とは相談する人も  
いないのだが、私の責任分担について  
はこの際はっきりさせておく。

私が書いた写真説明中第十三図は不  
正確である。ただ当時この写真は確か  
に見せてもらったなかった。葉師氏自  
身からならわかなかった。それが  
一年以上たった今頃機関紙といえ公  
の場で誤りだと指摘する意図は何か。

「第二図『ダウラギリ』の左方の尾根、  
岩場と雪、ヒマラヤひだを比較すれば  
簡単に同定できる。」簡単に同定でき  
るなら深田氏のお宅で深田氏に現物を  
見せた時、簡単に同定すればよかった  
ではないか。誤りを指摘するのはあり  
結構な事である。当事者としてはあり  
たいと思っている。しかし社会通念が

上常識的なやり方があるはずだ。葉師氏が今回の問題に無関係ならそれともよい。しかし写真を見せられた張本人ではないのか。同定できれば機関紙などに掲載する前に私なら『ヒマラヤ』の編集部に一報してくれるのが世間の常識である。そしてそれが早ければ本が發行される前に当然訂正されている。とにかくこの十三圖の写真説明の誤りにについては四十六年十月『ヒマラヤ』を發行した直後私自身で気がつき同年十二月の私の写真展「神々の座」にはすでに説明は入れ替えた。誤りを訂正して十ヶ月後に誤りだと指摘してくれる意図は何なのか。ついでに書くとか昨年のクリスマスにニューヨークのN・E・イブラムズ社からうりだされた『ヒマラヤ』アメリカ版の十三圖写真説明にももちろん新しくなっている。もうひとつついでに書かせてもらうなら「宝は向うの山がよく判らない」と正直には向うの山がよく判らない」と正直に書いているのだ、何も適当にウソを捏造して書いたわけではない。

私の責任分担ではないが、『サウワラ峰』と『グルジャ・ヒマル』の問題にしても一九六九年秋にグルジャ・ヒマルとして登頂したものが、その二年後の一九七一年秋出版された『ヒマラヤ』にサウワラ峰として掲載されているからといって、それで「前者は古典的であるといえるだろう」とか「こんな類のクラシクなものはすぐ目立ってしまうのである」とかの表現が適切であるのかどうか。私の個人的見解だが、山名や標高はアルプスのマッターホルンやモンブランのように誰が見ても疑いなくなくてはから訂正しても決しておかしくはない。

私が職業としている写真の世界ではデータや解説に誤りがあれば電話か私信で誤りは指摘するが、すぐ写真家協会ニュースや写真協会報に掲載したりはしない。

（白川義員）

◆ ◆

昨年来白川氏の『ヒマラヤ』をめぐって種々ご意見を寄せていただきましたがこのたび白川氏の右の来信に接しましたので掲載いたします。

会報紙面の都合上、今後のご意見の掲載はひかえさせていただきたく存じます。

(編者)

会 務 報 告

三月理事評議員会

(23日午後6時本会ルーム)

▽出席者 三田会長 吉沢副会長  
中屋 板倉 伊倉 宮下 坂下 近藤  
大森 須田 丹部 神崎 俣山各理事  
織内 佐藤 望月各評議員 今井監事

▽議案

・昭和四十八年度理事、監事、評議員候補者推薦の件 (中屋)

定款第十四、十五条および細則第七、八条の規定により推薦した候補者を通常会員総会に提出することにした。

・昭和四十八年度事業計画案および収支予算案の件 (中屋)

原案について大要説明の後、原案どおり承認、文部省に提出するとともに、通常会員総会にはかることにした。

・ルーム賃貸の件 (中屋)

ルームの賃貸借契約が五月末で切れるので、ルーム移転準備委員会を設けて、移転先などについて、早急に準備をすめたい。委員については、交野武一、沼倉寛二郎、松本熊次郎、倉勝正、伊倉剛三の各氏にお願いする。

・三月末入会申込者取扱いの件 (中屋)

三月末入会申込者については、三月三十一日消印のものを四十七年度入会とみなし、四月十一日の理事会にはかることにしたい。

會務報告

・複写事務取扱規定制定の件 (中屋)

図書委員会で作成した原案を検討、三月二十四日よりこの規定に基づいて実施したい。(次号掲載)

▽報告事項

会報編集代表は五月号より春田俊郎氏があたると。三井航空より毎月一頁相当の広告掲載申し込みあり、委員会で検討した上で決定したい。(坂下)

・別宮家より和洋書五十冊の寄贈があった。また松方氏の知人中木島氏よりも寄贈の申し出があり近日中に訪問の予定。第一回山岳史懇談会は名誉会員三枝守博氏をお招きして、三月二十一日に開催する。(近藤)

・夏山診療所開設について今後の方針と反省会を三月三十一日に開く。(大森)

・毎月の定例集會日を明年度も二十日とする。なお五月二十日は大岳の集會中登山を予定している。(神崎)

・ヒンズリークシュを含めカラコルム方面への入国は見込みがないので、今年もネパールに集中すると思う。最近トレッキングの遭難が目立って多くなって来たこと。今年はネパール地方の天候が不順で各隊とも困難な状態にある模様。(丹部)

・その他婦人懇談会(須田) 青年懇談会(帰山) から報告があった。

**会員異動**

改姓

六四三四 藤原 謙二 旧姓後城  
六六二三 山村 良司 旧姓嶋岡

**物故会員**

一五〇九 城山 正三 昭和四八・一  
・二三逝去

**ルーム日誌**(48年2月)

2日(金) 評議員会

## お知らせ

## \*第13回登山技術講習会

恒例の登山技術講習会を富士山で行います。男女を問わずふるってご参加下さい。(三〇名に限りです)

記

於 富士山

日程 五月十七日夜、東京発(バス)

五合目お庭小屋

五月十八日 五、七合目にてト

レーニング

五月十九日 登頂・パーティ別

トレーニング

五月二十日 トレーニング 反

省会 五合目発東京帰着

参加費 六五〇円(会員)、七五〇円

(非会員)

詳細ほかについては申込者において通知いたします。(指導委員会)

## \*第11回 金山平木暮理太郎翁

## 碑前懇親会へのご案内

本年は木暮理太郎翁生誕百年の記念すべき年です。山梨支部では懇親会の準備を着々すすめておりますが、車が奥まで入るようになり、山菜もだんだん少なくなつてしまい、皆様を充分おもてなしできません。したがって、今回は人数制限をいたすことにしました、はなはだ不本意なことですが、別記事項お含みの上おいで下さいませよう、ご案内申し上げます。なお今回は従来さしあげておりました個人への案内状をさしひかえさせていただきますが、あしからず。

記

日時 昭和四十八年五月十九日(二十

日新宿発十時三十分発 アルプ

ス二号が便利です。

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平有

井館(電灯、電話なし)  
行事 十九日午後四時より碑前祭 同

六時から懇親会

2 二十日 各登山行、金峰山、み

ずがき山、木賊峠、信州峠など

会 費 一人・三千元(夕、朝食、こん

親会費、記念品代を含む)。

人員 三十五名を限度とします。

申込 五月十日まで、甲府市武田三

六・一七 山村正光あて

交通 国鉄中央線韮崎駅から山梨交

通バス、増富ラジウム温泉行き

バス終点下車徒歩一時間半、マ

イクロバス、タクシーの便あ

り。(山梨支部)

## 現地小集会(十勝岳)申込み

は五月二十日に締切ります!!

会報三三二号(二月号)でお知らせした通り、今年の現地支部長会議・現地小集会は北海道・十勝岳で行います。申込みは直接北海道支部へ。先着一〇〇名程度まで。(北海道支部)

## ★上高地山岳研究所

募金状況(48・3・30現在)

※応募件数 四七八件

※金額 四、〇五〇、九〇三元

※目標額対比 八一%

いよいよ研究所のオープンが間近に迫りましたが、募金は当面二〇%以上をめざしています。会員諸氏の協力をお願いいたします。

## ★会費納入のお願い

本年度から会費は六月三十日までに納入することが決まりました。

6日(火) 財務委員会

7日(水) 青年懇談会

9日(金) 理事評議員会

12日(月) 学生部委員会

13日(火) 図書委員会

15日(木) 明治大学山岳部

16日(金) 中央大学山岳部

20日(火) 集委会 指導委員会

21日(水) 明治大学山岳部

22日(木) 山岳図書を語る夕べ、講師 田辺主計、吉沢一郎、山崎 安治氏

23日(金) 評議員懇談会

26日(月) 書評委員会

27日(火) 図書委員会 集委会

あとがき 次号から春田俊郎さんが本誌編集を担当されることになった。会報は『山岳』同様、会員を結ぶパイプ役として、時には山岳界発展の重要な場としても利用されてきたが、近年、高所登攀の研究や自然保護運動とともに本会の歴史発掘の動きが会員の中に広がっているように思う。それを将来の発展にまで結びつけるのは容易なことではあるまいが、新しい角度からとりくまれている春田さんの、本会に寄せる情熱は並々ならぬものがあり、大いに期待したい。勤務先の都合とはいえ、一年足らずで辞退するのは残念でならないが、歴代編集長をはじめ多くの方々のご好意を深くかみしめながら、筆を置くことにする。(坂下)

昭和四十八年四月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 坂下 心一

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

会費納入は 6 月 30 日まで。 （東京、千葉、神奈川、埼玉在住会員 5,000 円、地方 3,500 円）

# 茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

## ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

## 森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A 5判482頁〉定価1,500円

## すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

## 遠い山・近い山

望月達夫著

〈B 6判334頁〉定価960円

## 山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

## 雪山・蔵山

川崎精雄著

〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

## 雪原の足あと

坂本直行著

〈B 5判206頁〉定価2,800円

## 遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

〈B 5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

## 山日記1973年版

日本山岳会編

〈A 6判344頁〉定価850円

## 山 岳

日本山岳会編

〈A 5判〉

66年 2,300円  
65年 2,000円  
64年 2,000円  
63年 2,200円  
62年 2,000円  
総索引 1,000円

## 国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A 5判リング綴り〉定価960円

## 屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B 6判202頁〉定価480円

## 山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

## いろいろばた

南会津山の会

〈B 24どり判320頁〉定価1,900円

シブトンの自叙伝

## 未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A 5判440頁〉定価1,900円

## 日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

## 山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

## 日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A 変型208頁〉定価3,600円

## 登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A 5判350頁〉定価900円

## 登山・スキー用具専門店

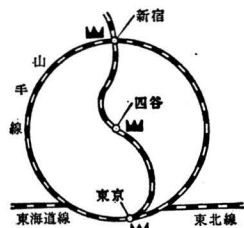
●買い易い  
山の店

# 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら  
山の店

●フレッシュな  
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

## 山とスキーの専門店

# 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも  
持たない方がいい  
けれど、どうしても  
要するものがある。  
なにしろ人間ですから  
そして登山ですから  
どうしても必要なものを  
そこに入れてみる  
責任はもてます

かたるぐンテイ  
でんや 281-8456  
中央区・八重洲4の1

秀山荘

## 登山とスキー具

# イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

## 登山用具の専門店

# 好日山荘

東京都中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031  
東京都中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店  
大阪府・北木曽町上 1 1 4 7 (364) 0933 (伊)  
福岡店・筑 豊 1 1 4 (28) 3440

